

列國の史事を廣く所載してゐるけれども、衛聚賢氏が「古史研究」で論じた如く、三晉の史實を記述してもつとも詳密を極めてゐることは、何人も否定できない事實である。

左傳の傳説の史料としては、三晉の國史及び傳説がもつとも多く利用されてゐるのであるから、その主要部分が三晉で著作せられたことはむしろ當然であつて、魏に於ける子夏の後學の徒の間で左傳國語の原型が編纂せられたと推定することも、或はあながち無稽の想像とはいえないであらう。たゞこの點に關しては左傳を魯國の君子左邱明の著作とする劉向の別錄に記してゐる傳受の系統が障害となるけ

れども、この後起の傳受の系譜に大きな考慮を拂ふ必要はなからうと思はれる。これらの點に關しては更に詳論する機會を待つこととして、こゝには贅しない。

要するに左傳に普遍的な威儀によつて人の運命を豫言する傳説は、これを儒教の禮説の變遷史から見ると、孟子荀子のとく如き社會國家の規範乃至は基本法としての禮の觀念ではなくて、貴族的教養としての威儀觀によつて書かれてゐるので、三晉の子夏の門弟たちの間で成長した説話であつたと考へるべきであらうといふのが私の到達した結論である。

ソロモン王のオフィル航海に就いて

織田武雄

「ソロモン王エドムの地紅海の濱に於てエラテの邊りなるエジ
オンゲベルにて船數隻を造れり、ヒラム海の事を知る舟人なる

其僕をソロモンの僕と偕に其船にて遣せり彼等オフルに至り其處
より金四百二十タラントを取りて、これをソロモン王の所に携來

る」(列王紀略上九・二六一—二八)

「オフルより金を載來りたるヒラムの船亦オフルより多くの白檀木と寶石とを運び來れば玉白檀木を以てエホバの家と王の家とに欄干を造り歌謠者のために琴と瑟とを造れり是の如き白檀木は至らざりき亦今日までも見たることなし」(列王紀略上二〇・一一—一二)

「ソロモン王の用ひて飲る器は皆金なり又レバノン森林の家の器も皆純金にして銀の物無かりき銀はソロモンの世には貴まざりしなり其は王海にタルシ、の船を有ちヒラムの船と俱にあらしめタルシ、の船をして三年に一度金銀象牙猿猴および孔雀を載て來らしめたればなり」(列王紀略上二〇・二一一—二二)

「茲にソロモンエドムの地の海邊にあるエジオンゲベル及びエロテに往けり時にヒラムその僕等の手に託て船を彼に造りまた海の事を知る僕等を遣りけるが彼等すなはちソロモンの僕と共にオフルに往きて彼處より金四百五十タラントを取りてソロモン王の許に携へ來れり」(歴代志略下八・一七一—一八)

「かのオフルより金を取きたりしヒラムの臣僕とソロモンの臣僕等また白檀木と寶石とをも携さへいたりければ王その白檀木をもてエホバの家と王の宮とに段階を作りまた歌謠者のために琴と瑟とを作れり是より前には是のごとき者エダの地に見しこと無りき」(歴代志略下九・一〇一—一一)

ソロモン王のオフル航海に就いて

一

イスラエル王國がその繁榮を四隣に誇示したのは、ソロモン王治下の時代(紀元前九七二年—九三三年)であつた。父王大ダビデからイスラエル王國を受繼いだソロモンは、ダビデの武力政策から通商政策に轉じて専ら國力の涵養に務めまたイスラエルの諸民族の統一と國威を象徴するために、エルサレムのシオンの丘に豪華華麗な神殿と王宮を建造し西南アジアの一角にその富強を輝すに至つたのである。この「ソロモンの榮華」と世にうたはれ、エルサレムに銀、石の如くに在る」とまで呼ばれたイスラエル王國の莫大な富力が、ソロモン王がフェニキアのティルスの王ヒラムと修交を結び、海外通商に基く富國政策を實行することによつて蓄積されたものであることは云ふ迄もないが、殊に當時世界の羨望の的であつた「オフルの金」^①が、ヒラムの援助によつてソロモンの許に齎らされたことである。

オフル、即ちオファイル(Ophir)への航海に就ては、舊約聖書の列王紀略及び歴代志略の記すところに従へば、ソ

ロモロの命を受けたイスラエル人が、ヒラムによつて派遣されたフェニキア人の航海者の助力の下に、紅海の東北角に當るアカバ灣の最奥に位置して居た *Esion Gabel*、即ち現在のアカバに於て船隊を組織してオフィルに赴き、三年後の航海を経て、オフィルから四二〇乃至四五〇タラントの多量の金と、外に銀・寶石・象牙・猿猴・白檀木・孔雀をも満載して歸國したこゝとなつて居る。以上が黄金國オフィルに就て知り得る唯一の史料であるが、このオフィルが果して現在の何れの地方に當るか云ふ問題は、それに就て種々の推定が行はれたにも拘らず、今日まで依然として謎の土地と考へられて來た。よつて私はこの小論に於て先づオフィルに關する從來の諸説を検討し、單に地名や産物の名稱の類似以上に根據を有しないものは否定して、少くとも古代に於て金を豊富に産出し、また紅海沿岸から古代の海上交通を以て到達し得たと考へられる範圍の土地にその所在を求めることによつて、古代の歴史地理學研究の立場から、オフィルの位置と、その航海に就ての若干の考察を試みたのである。

① 「オフィルの金」が如何に貴重なものと看做されて居たかは、例へば「オフィルの金にてもその價を量るべからず」(ヨブ記二八・一六)、「われ人をして精金よきかねよりもすくなくオフィルの黄金よりも少からしめん」(イザヤ書一三・一二)などと記されている。

② 前記の如く列王紀略上九・二八には四二〇タラント、歴代志略下八・一八には四五〇タラントとなつて居るが、ヘブライ語の二〇及び五〇の文字は類似して居るために何れかの誤記によるものと考へられる。

二

オフィルの位置に就ては古來世界の諸所に推定されたが就中最も之を遠方に求めたのは、オフィルを南木のペルーと看做す見解である。

このペルー説を始めて唱へたのは、十六世紀のスペインの人文主義者 *Arias Montano* であると云はれて居るが、當時偶々ピサロによるペルーのインカ征服が行はれ、ペルーの金の豊富なることが誇大に歐羅巴に喧傳されたが爲に十六、七世紀にはペルー説が相當流行を見た模様である。

併しペルー説の主なる根據とするところが、聖書にはソロモンがエルサレム神殿の造營に使用した金を「バルワイムの金なり」(歴代志略下三・六)とも記して居るために、

Ophir Parvaim 即ちペルーなりと云ふに過ぎないのであつて、^②學問的には何等省らるべき價值を有して居ない。たゞ十九世紀には再びこのペルー説が、O. de Thonon によつて採り上げられて居る。即ちその所餘に従へば、聖書に記されたオフイルの産物を示すヘブライ語の名稱のみは、

ペルーのケチュア・インディアナ語に由來するものであり例へば白檀木のヘブライ語 *alqumim* はケチュア語の *alli* (良ス) 及び *mucay* (感ずる)、既ち「香木」、また猿猴の *hopik* も同じくケチュア語の *hapi* (手で掴む) の意味に當ると云ふのである。併し言語學の立場からみても、このペルー説は餘りにも大膽な臆説たるのみならず、エジオンゲベルを出帆したソロモンの船隊がアフリカを周航し、更に

ヴェルデ岬から、大西洋を横斷してペルーに向つたとする推定は、當時の海上交通の段階からみて絶対に不可能である。

従つて太平洋のソロモン群島の名稱から、之をオフイルとする俗説の如きは全然無意味である。ソロモン群島は一五六七年、スペインの航海者 Alvaro Mendana によつて始めて發見されたのであつて、メンダナは同群島が自然の富源に恵まれて居ることを希望して、ソロモン王の當に因んで *Islas de Sa Lomon* と命名したに過ぎないのである。

また *Welser-Welt* 編の「教會辭典」(*Kirchen Lexikon*) によれば、オフイルはタルシ、と同一なりと看做して、タルシ、即ち南スペインにあつたフェニキアの植民地タルテソスにオフイルを想定して居る。オフイルを以てタルシ、とした根據は、「其は王の舟フナトヒラムの僕を乗せてタルシ、に往き三年毎に一回その舟タルシ、より金銀象牙猿および孔雀を載て來りたればなり」(歴代志略下九・一一)によるものと思はれるが、これは前記の「タルシ」の船をして、三年に一度……(列王紀略上二〇・二三)と解すべきであらう。^④よしんばオフイルをタルシ、としても、タルテソスは銀及び錫の産地としては著名であつたが、金の産出に就ては全く記録がなく、白檀木・猿猴・象牙・孔雀等も産しな

い。またタルシノに向ふために、地中海と紅海を連絡する運河がまだ存在しなかつた當時では、アフリカ周航——それは極めて危険であり、殆ど不可能と考へられる——以外にはなかつたエジオンゲベルを出發點に態々選ぶことはなかつた筈である。

① H. Barron: *Les Navigations du Roi Salomon*, (*La Géographie* LIX, 1933) p. 281.

② R. Hennig: *Terrae incognitae*, Leiden 1836, Bd I, s. 20.

③ O. de Thoron: *Voyages des flottes de Salomon et d' Hiram en Amérique*.—H. Barron: *op. cit.* p. 281—292, に於る

④ *Paeycropaedia Britannica* (4th. ed.) London 1929, Vol. XX, p. 951.

⑤ *Kirchenlexikon* (Weizer u. Welte), Freiburg I. B. 1891, Bd. I K, p. 926

⑥ *Quatremere* は *Tarshisch* は *トシキヤ語* の *Arstis* (長く船) と同義語であり、*トシキヤ* 人が長途の航海の後到達し得た最も遠隔の土地に對してこの名稱を附したと解し、即ち *トシキヤ* の *Tarshish* が彼等の西方航路の最西端に當る如く、オニールは東方航路の最遠距離地點に

當るため、その土地を *Tarshish* と名づけたのであると述べて居るが、附會の説と看做すべきであらう。E. Barron: *Op. cit.* p. 281.

三

以上の諸説は何れも論據が極めて薄弱であるのみならず、オニールの航海がエジオンゲベルを出發點として居る以上オケイルには前記の諸地方に存在する筈はなく、當然紅海から印度洋にかけての方面に求めらるべきである。

先づ印度の方面に於て、オニールに當る地方として最も古くから唱へられて居るのは *マレー半島* である。即ち紀元一世紀のユダヤの歴史家 E. Josephus は「*ユダヤ古事記*」(*Antiquitates Jud.*) に於てソロモンのオニール航海を述べ、「昔は *Sopheira* (オニール) と呼ばれ、今は印度に屬する *Aurea Chersonesus* (黄金國) と云はれる土地に金を獲得するために」と記して居る。アッレバ、ケルソネスのことは *プトレメーオス* などにも見え、^② 古代に於ては一般に印度洋の東方の *クリニエー*、即ち現在の *マレー半島* 附近に黄金國が存在すると考へられて居た。一説には *コロ*

ンブスも亦このクリューサーがオフィルに當ると信じ、彼の探險航海の目的にはオフィル發見の希望が多分に含まれて居たと云はれ、スペインの歴史家 *Petrus Martyr* の記録によれば^③、コロンブスは金を産出したイスパニオラ（ハイチ島）がオフィルではないかとの疑念を懷いたことが傳へられて居る。

近代に於けるマレー説の支持者は *K. L. von Beer* である^④。バエルの見解によれば、印度洋の海上交通は季節風モンスーンの利用によつて非常に古くから發達し、マレー半島の錫の如きも、ギリシヤ語の錫 *Kassinos* が梵語の *Kastina* に由來すると解すれば、ブリテン島やイベリア半島の錫よりも遙か以前から採掘されて地中海方面にも輸出されて居たと看做し得る。従つて黄金國と考へられたマレー半島では、金鑛の採掘も錫鑛業の發達と共に早くから開始され、これが即ち古代のオフィルであると推定して居る。また *Vien de Saint-Martin* が述べて居る如く、現にマラッカ市の北方約三〇軒の地點には、*Mal. Ophir* とも稱されるグノー・ラダン山（一二六九米）が存在する。

ソロモン王のオフィル航海に就いて

併し乍らマレーに於ける錫鑛業の起源は決してバエルが云ふやうに古いものではなく、古代に於ては「エリウットゥラー海案内記」(*Periplus Maris Erythrai*) に記されて居る如く、錫は逆に地中海方面からエジプトやアラビアを経て印度に輸出されて居たのであつて、梵語の *Kastina* なる名稱は、寧ろ錫そのものと共に地中海方面から傳へられたもの^⑤と考へられる。グノー・ラダン山のオフィルと云ふ名稱も、後世ポルトガル人によつて命名されたものでありスマトラ西海岸のタラクマウ火山にも同じくオフィルの別名が附されて居る。またアウレ アケルソネススが單に古代の航海者によつて世界の東の果てに想像された「理想國」の傳説だけではなく、*W. H. Schott* が認めて居る如く^⑥、バハン州に近年古代の金坑跡が發見されたことから、マレーに於ては既に古代から金の産出を見たのであるとしても當時の海上交通の状態から、マレー半島にオフィルを求めるとは困難である。

バエルが述べて居る如く、印度洋に於ては季節風の利用によつて紅海からセイロン島へ、セイロン島からマレー半

島へと海洋横断の航海が営まれて来たことは事實である。併し季節風の利用はギリシヤ人のヒッパロスによつて紀元前一世紀以後に發見されたのであつて、それ以前には印度洋でも他の海洋と同様に沿岸航海しか行はれなかつたのである。従つて紀元前十世紀のソロモン王時代に、エジオンガベルからマレー半島までの沿岸航海を行つたとすれば、少くとも五、六ケ年の年月を要したであらうし、而も斯る長期間の航海を單獨ではなしに、オフィル航海の如く船隊を組織して行はねばならぬとすれば、それは到底不可能であつたと考へられる。また實際地中海方面と印度洋との交通は紀元前までは、大體セイロン島以西に限られて居た模様であり、紀元前五世紀のヘロドトスに於ては、また漸く北部印度の記事が見えるに過ぎない。紀元一世紀頃の「エリュトウラー海案内記」は印度洋に關する當時の最も詳細な記録と考へられるが、同書に於ても印度西海岸地方から以東は記述が極めて漠然となり、前記クリニエーサーに就ても世界の東の果てにある島であり、最良の鰻を産するとのみ誌されて居る。^⑩

斯の如くマレー半島にオフィルを認めることが困難であるとすれば、印度はどうであらうか。

オフィルの印度説は J. Jasson によつて主張されて居るラッセンの主たる論據は、聖書に記載されたオフィルの産物のヘブライ語は概ね梵語或はデカンの地方語に語源を有すると云ふのである。即ち猿猴のヘブライ語 *Kaf* は梵語の *Kaf* 象牙の *Shen-kalin* の *Shen* (齒) はヘブライ語であるが、*habin* は梵語の *ibha* (象)、白檀木の *amargin* (列王紀略上 100・11) 或は *aligamin* (歷代志略下 9・10) は復數形語尾 *in* を取去れば梵語の *aliga* かデカン語の *Valgam* 孔雀の *harukajim* は梵語の *chha* かデカン語の *logeti* に夫々該當することとなる。従つて此等の言語學的考證からラッセンは印度にオフィルが存在したと考へ、インダス河口とカンベイ灣の間の嘗てアビーラ族が居住して居た地方、即ち現在のグジャラート地方を *Adhira* 〓 *Onhir* として推定し、^⑪ *C. Ritter* もラッセンの印度説を支持して居る。また *M. Cunningham* は前記のヨセフスがオフィルを *Sophira* と記してゐるところからして、グジャラート地方

に接する現在の南西ラジプトナ地方に當る古代の *Savira*
|| *Sophran* || *Ophir* と看做してゐる。^⑧

併しオフィルを以てラッセンの如くグジャラート地方、
或はカニングムの如くラジプトナ地方とすることは、ショ
ップが指摘してゐるように、地理的事實と一致し難い。即
ち此等の印度西部地方は金・銀等の鑛産物の全然存在しな
い純然たる農業地域であり、またオフィルの産物として聖
書に記載された象牙・猿猴・白檀木・孔雀は印度ではもつ
と南方のセイロン島かマラバル海岸にしか産出しない。

然らばセイロン島かマラバル海岸にオフィルを求めると
すれば、印度説は成立し得るであらうか。オフィルの産物
の名稱が前記の如く主に梵語の系統に由來し、また象牙・
猿猴・白檀木・寶石等は印度に多く産出し、殊に孔雀が南
印度の特産物であつたと云ふことは、印度説の有力な論據
と考へられる。併し乍らオフィル航海の直接の目的は金の
獲得にあつたのであるから、オフィルが印度以外の土地で
あるとしても、象牙・白檀木・孔雀等はオフィル航海の途中
の何れかの地點で、仲繼貿易として印度から求めることも

不可能でない。従つて問題は、古代に於て印度が果して産
金國であつたかと云ふ點である。現在の印度に於ける産金
地として知られて居るのは、マイソールのコラール金山で
あり、その産額は印度全産額の殆ど九九%を占めて居るが
その外にパンジャブ・聯合州・中央州・アッサム等のヒマ
ラヤ山脈、或はデカン高原から流下する諸河川の流域には
若干の砂金産地が存在する。ヘロドトスやプリーニウスに
よつて傳へられた蟻を利用しての砂金採集の説話が物語る
如く、此等の砂金産地では非常に古くから砂金の採集が行
はれたものと思はれる。併し乍ら現在でも印度の産金高は
世界の1%にも満たぬ有様であつて印度はその大きに比す
れば著しく金に恵れぬ土地であり、金は古來印度の重要な
輸入品たるのみならず、多額のローマ金貨も印度に輸入さ
れたのである。^⑨ 従つて斯る金に乏しい印度から、ソロモン
王が貿易によつて多量の金を求め得たとは考へられないこ
とである。またよしんば後に述べる如く、オフィルの航海
が普通の通商貿易ではなく、寧ろオフィル遠征とも云ふべき
掠奪形態の貿易であつたとして、イスラエル人とフェニキ

ア人の遠征隊が印度に侵入し、彼等自らその採掘に當つたと假定してみよう。併し印度の海岸地帯には何處にも金を産出しないから、オニール遠征隊は當然奥地まで侵入しなければならなかつたのであるが、イスラエルよりも文化も遙に古く鑛業も既に相當進歩して居たと想はれる印度に於て、金の如き最も貴重な金屬が他國人によつて採掘されるのを全く黙認し、或はそれが容易に國外に持ち出されるなことを許さざることではあらう。

- ① F. Josephs; *Antiquitates* VII, 64. A. R. Scillero; *The Works of F. Josephus*, London 1900, Vol. II, p. 101.
- ② Ptolemeus, III, 1, 15.
- ③ R. Hennig; *Terre incognitae*, Bd. IV, S. 400.
- ④ K. L. von Baer; *Wo ist das Salomonische Ophir zu suchen?* Petersburg 1873—A. Soetder *Das Goldland Ofir* (Vierteljahresschrift für Volkswirtschaft, Politik u. Kulturgeschichte, Bd. I, XVII 1880) S. 101—169, 174, 176.
- ⑤ Vivien de Saint-Martin; *Dictionnaire de Geographie Universelle*, Tom. P. 7032A.
- ⑥ Periplus Maris Erythraei (東川類文叢書・マルティ

- ⑦ ンナー海案内記) 28, 49-56. W. H. Schoff; *The Periplus of the Erythraean Sea*, New York 1913, p. 77—79. 村川氏同書二〇九頁註二參照
- ⑧ E. Balfour; *The Cyropoedia of India, and Eastern and Southern Asia*, London (Gardner.) 1885, Vol. III, p. 27.
- ⑨ W. H. Schoff; *op. cit.* p. 259.
- ⑩ 拙稿 印度洋に於ける古代の海上交通と季節風 (日本史研究第七號一〇—一四頁)
- ⑪ 「此の河に對して大洋の中に一つの島があるが、人の住む世界の東に向つた部分の果む、正に昇る朝日の下に位置し、ネーターカーンと呼ばれ、モリタタナー海の終りの場所の中に、*ペリplus*の島を居る」(Periplus, 63. 村川氏譯 174, 176)
- ⑫ Classen; *Indische Alterthumskunde*, Bonn 184—41 861, Bd. I, s. 651—652.
- ⑬ C. Ritter; *Erdkunde von Asien*, Bd. VII, 2. Abthl., s. 343—387.
- ⑭ A. Cunningham; *The Ancient Geography of India*, London 1871, Vol. I, p. 497, 561.
- ⑮ W. Schoff; *op. cit.* p. 175—176.
- ⑯ *The Imperial Gazetteer of India*, Oxford 1905, Vol. III, p. 141—143, 235.
- ⑰ Herodotus, III, 102—5.
- ⑱ Plinius, XI, 36.

- ⑫ G. Watt: The Dictionary of the Economic Products of India, London 1908, p. 565.
 ⑬ E. H. Warrington: The Commerce between the Roman Empire and India, Cambridge 1928, pp. 273-293
 ⑭ I. Beck: Geschichte des Eisens, Braunschweig 1884, Bd. I. s. 269.

四

以上の如く印度にオフィルが存在しないとすれば、次にアラビアに就いて考察しなければならぬ。

アラビアはイスラエルに最も近い位置にあり、且つ創世記(10・26—30)には、オフィルはシバ・ハビラなどと共にヨクタンの子の一人であり、「彼等の居住所はメシヤよりして東方の山セバルにまで至れり」と記されて居るため、オフィルのアラビア説も従来相當有力であつた。殊に聖書にはソロモンに香料や寶石と共に金一二〇タラントを贈つたシニバ女王の物語(列王紀略上10・10)やハビラの金(創世記22・1—12)——シエバ(シバ)は現在のイエーメンに當るが、ハビラがアラビアであるか

ソロモン王のオフィル航海に就いて

はなほ確實でないにしても——のことが見えて居るのみならず、古代に於てアラビアに實際金を産出したことは、デイオドロスによつて「アラビアではまた *apryros* (火を入れなうの意味)と稱される金が採掘されるが、これは他の人々の許に於けると異り、砂金を溶解したのではなく、掘り出したままの状態で大さは粟に似てその色は火のやうに①いて居る」と述べられ、フリーニウスも「*apryon*と呼ばれる金」と記して居る。

然らばアラビアに於ては、従来何れの地方にオフィルが推定されたであらうか。H. E. Burton^②は金坑の遺跡が発見され、北部アラビアの古い産金地であつたミディアの山地を以てオフィルであると述べて居るが、オフィル航海の出発地であつたエジオンゲベルそのものもミディアであるから、出發地と略同一の場所にオフィルを求めることは無意味であらう。

アラビアの南部では、イエーメン地方がアラビアの最も肥沃な土地であり、且つ前記の創世記に示された部族の系譜や或はシニバ女王の物語からみて、シニバ即ち現在のイ

エーメン地方とオフィールとが相當密接な關係を持つた位置にあつたことは想像される。従つて B. Moritz は金山の廢坑が多數存在するエーメン北部の山地をオフィールと考へ、或は *Omba* と音が類似することから、A. H. Keane はアラビア海に面する Dhofar 海岸や、C. H. Pollock は近年古代都市の遺跡が発見された Watar を以てオフィールに比定して居る。

また東部アラビアでは、「ユリウトゥラー海案内記」にベルシヤ灣岸の *Oman* が印度洋に於ける唯一の金の輸出港として記載されて居るが、事實この東部アラビアから中部アラビアのネジトワハビー地方にかけて多數に見られるワヂの河床には砂金を産出するため、E. Glaser は *Yemman* 附近の土地がオフィールに當るのではないかと想定し、シヨッフも亦この見解に左端して居る。

併し乍ら、例ひアラビアの何れの地方に豊富な産金地が見出されたにしても、オフィールへの交通がエジソンゲベルからの海上交通を以つて行はれたことを考へるならば、オフィールはアラビアには存在しなかつたのである。何故なら

ば、紅海やベルシヤ灣の一部では沿岸航海による小規模な海上交通が營まれて居たにしても、アラビア本土間に於ける交通は凡て隊商による陸上交通を以て行はれたのであつて、シニバ女王のソロモン王訪問の旅行も亦、エーメンからイェルサレムまでの長途の隊商旅行であつた。勿論水の乏しい砂漠の隊商交通は陸上交通としては最も困難なものであるが、小型の脆弱な船舶しか使用し得ず、而も羅針盤も海圖も存在しなかつた爲、僅かに靜穩な晝間のみしか沿岸航行を行ひ得なかつた古代の海上交通に比較すれば隊商交通の方が一日の行程も大であり、旅行も遙に容易であつたと考へられる。殊に灼熱不毛の紅海やアラビア海の沿岸航海が如何に困苦と危険なものであつたかは、アレクサンダー大王の印度遠征の歸途に於けるインダス河口からユフラテス河口までのネアルコス①の航海記によつても想像し得るところである。

従つて若しオフィールがアラビア南部の或は東部の何處かに存在して居たとするならば、オフィールへの交通はパレスチナやシリアから、ヘッヂャズ或はネジド等を経て此等の

地方に通ずる隊商通路が當然選ばれたに相違ないのであつて、エジオンゲヘルから遠く紅海やアラビア海を迂回し、時日も多く要すれば危険も大なる海上交通を態々行はねばならなかつた理由を何等見出し得ないのである。また古代の隊商交通に於ても相當多量の貨物を輸送し得たのであつて、前記シェン女王の隊商旅行に於ても、香料や一二〇タラントの金が運搬されて居るのである。

- ① Diodorus, I, 50.
- ② Plinius, XII, 11.
- ③ R. P. Burton: The Land of Midia, London 1627;—A. Soethbeer: a. a. O., S. 128 以下。
- ④ R. Moritz: Arabien, Hannover 1927;—H. von Wissmann: Uebersicht über Aufbau und Oberflächengestaltung Arabiens (Zeitschrift, d. Geogr. Erdkunde z. Berlin, 1922) S. 249, 以下。
- ⑤ A. H. Keane: The Gold of Ophir, London 1901, R. Henning; a. a. O. S. 25, 以下。
- ⑥ C. H. Pollog: Geogr. Zeitschr. 1924, S. 49.
- ⑦ Periplus; § 36.
- ⑧ F. Glaser: Skizze der Geschichte und Geographie Arabiens, Berlin 1890, S. 257—288, H. Schöff; hie Arabiens, Berlin 1890, S. 257—288, H. Schöff;

ンロホム王のオフィル航海に就て

op. cit. p. 280—1. による。

⑨ 拙稿 ネアルロムの印度洋航海記 (學藝三七號二〇—二六頁)

J. W. Mc Crindle: The Commerce and Navigation of the Erythraean Sea (The Voyage of Near Khos), Bombay 1879, 153—224.

五

オフィルが印度やアラビアに存在し得ないとすれば、殘るところはアフリカの大陸であるが、アフリカに於てオフィルが早くから想定されたところは、モザンビック (ポルトガル領東南アフリカ) の Sofala の附近である。

東南アフリカに金を産出することは、既にアラビアの旅行家 Ibn Batuta が一三三五年頃にソフアラ海岸を訪れた際、ソフアラより約一ヶ月行程の Yonfi と稱される奥地から、ソフアラに砂金が送られて来ることを傳へて居る①。またヴァスコダガマによる印度航路の發見以後は、ソフアラは印度への經由地點としてポルトガルの植民地經營が始められ、南アフリカの金礦がまだ發見されて居なかつた當

時に於ては、ソフアラはアフリカ東海岸に於ける唯一の金の集散地として知られるに至つた。殊にソフアラの地名はオフィルに音が類似するのみならず、紀元前三世紀頃にエジプト在任のユダヤ人によつてギリシア語に翻譯され、一般に「七十人譯舊譯聖書」(Septuagint)と呼ばれる聖書にはオフィルは *Sophara Sopora* などと記されて居る。^②従つてソフアラを以てオフィルと看做す人々も多く、例へば *D'Anville* はエジプトンゲベルからグアルダフィ岬を廻つてオフィルに當るソフアラまでの海上距離を八千料としこの全航程を晝間のみの沿岸航海によつて往復するならば、聖書に記された如く、略三年の年月を要するものと推定して居る。^③ *E. Quatremere* もダンヴィルに従つてソフアラ説

を支持し、印度説が論據の一つとして居るオフィルの産物も、象牙や白檀木の如き香木類は印度よりは寧ろアフリカに豊富に産出するばかりでなく、ヘブライ語の *ankibim* も印度の特産の孔雀ではなくして、アフリカに棲息する鸚鵡の一種か、ホロホロ鳥を指すのであると解してゐる。^④

併し乍らソフアラ説が最も有力視されるに至つたのは、

獨逸の探險家 *K. Mauch* によつて一八七一年に *Zimhawe* の遺跡^⑤が發見されてからである。ソフアラの附近には古代の建築物の廢墟や金山の廢坑が存在することは、既に一五七八年ソフアラを訪れたドミニカ派の僧侶 *Juan dos Santos* や十七世紀のポルトガルの歴史家 *J. de Barros* などによつて傳へられて居たが、このデンバブウ^⑥の發見によつてそれが實證されたのである。

デンバブウの遺跡はその後、*J. Bent* や *H. Schlichter* などによつても調査されたが、その結果によればデンバブウエの位置はソフアラの西方約三二〇料、即ちサビ河上流に近い地點にあり、平原に點在する丘陵上には、高さ約三〇呎の厚い石壁に圍まれて、長さ約三〇〇呎、幅約二〇〇呎の巨大な隋圓形ものを始め、幾つかの石造建築物の廢墟が残存し、またこの地方からザンベンシ河流域にかけては無数の金鑛を採掘した跡やその精鍊に用ひた遺物も發見されて居る。デンバブウの遺跡が堅固な石壁を繞らして居ることからみても、一種の防禦的な要塞として構築されたものであることは餘かである。併し石造建築物には隋圓形

を呈するものもあつて俗に「寺院^{デンプル}」とか「本丸^{アッコボリス}」と呼ばれるものもあり、古代のイスラエルやアラビアの寺院や王宮とその構造が類似して居る點も認められるため、マウヒヤベントなどはデンバブウニの遺跡は建築技術の點からみても、フェニキヤ人やイスラエル人の如き文化の發達した民族によつてアフリカのこの僻遠の地に既に古代から建造されたものであり、従つてソファアラを中心とする此等の地方こそ、問題のオフィルに當ることを主張して居る。

以上のソファアラ説に於ては、印度説やアラビア説と比較して、假説としての矛盾は一應認められない。併し乍らデンバブウニの遺跡が、イスラエル人やフェニキヤ人によつて作られたものであるかは遽に決定し得ない問題であり、D. Randall-Maciver の如きは、南アフリカに所謂モノモタッパ (Monomotapa) 王國を建て、居たバンツ・ネグロの祖先によつて十四、五世紀に作られたものであると推定して居り、^①デンバブウニの遺跡が何れの時代如何なる民族によつて建造されたかはなほ解決されるには至つて居ない。

またデンバブウニの遺跡の問題とは離れて、ソファアラの

ソロモン王のオフィル航海に就いて

地方がアフリカの古來の産金地であつたとしても、その存在が果して地中海方面に古くから知られて居たかは疑問である。若し東南アフリカと地中海方面との間にソロモン王の時代、即ち紀元前十世紀頃から何等かの交通が行はれて居たとすれば、それより十世紀以上後の時代のものであるにしても、印度洋の地理的事情を最も詳細に傳へて居る「エリュトウラー海案内記」やブトレメイオスの著書にも、東南アフリカに就ては、何等かの記録が見出される筈である。然るに此等の地理書によつて知られるアフリカ東海岸の最南の地點は「エリュトウラー海案内記」では現在の東アフリカのバガモヨールからキルワまでの海岸の何處かの地點に當ると考へられる *Pakapa* ブトレメイオスでは大體デルガド岬に比定される *Prasum Pionontorium* 迄である。^②何れにしても東アフリカより以南の地方即ちモザンビック海峽から東南アフリカにかけては全く未知の土地となつて居るが、それは前記のデルガト岬からザンジバルまでの沿海は南赤道海流が赤道逆海流に轉ずる海域に當り、所謂東アフリカ沿岸流と稱され、マダガスカル島の最北端アンバー

岬から年中北流するところの強力な海流が認められ、紀元一世紀頃の熟練したギリシア人やローマ人の航海者にとつてもこの海流を乗り切つてモザンビック海峡を南下することが出来なかつたからであらう。尤もヘロドトスによれば、紀元前六世紀にエジプト王ネコの命を受けたフェニキア人が紅海を出發し、アフリカの東海岸を経て、アフリカ大陸を一周し得たとされて居るが、このアフリカ周航が果して實際可能であつたかどうかは、ヘロドトス自身も否定して居る如く疑問である。例ひよしそれが實行されたにしても、航海術に最も熟達したフェニキア人の探險航海であつた事實を認めねばならない。従つてこれよりも四世紀も古い紀元前十世紀の時代に、海洋には殆ど未経験のイスラエル人をも乗せた小型の撓船が、ギリシア人やローマ人の航海者にとつても不可能であつたと思はれる海流を、而も船團をなして乗切り、遙か東南アフリカのソファラの附近まで到達し得たとは全く考へられぬことであらう。

① K. Hemming, *Terre incognita*, Bd. III S.165.

② A. Soethbeer; a.a.O., S. 121.

③ J. Quatremere; *Memoire sur le pays d'Ophir* (Memoires de l'Institut Royal de France, Paris 1845) — K. Buron; *op.cit.* p. 228—231. 244.

④ K. Mauch; *Reisen in Sudafrika*, (Peternann's Mitteil. Erg.-Heft XVII Götta 1874.) S. 49 ff.

⑤ A. Soethbeer; a.a.O., S.121—2

⑥ J. Bent; *The Ruins of Mashonaland and Explorations in the Country* (Proc. Roy. Geogr. Soc., Vol. XIII, 1892) p. 273 sq.

⑦ H. Schlichter; *The Ruins in Mashonaland*, (Geogr. Journ. Febr. 1898) — *Historical Evidence as to the Zimbabwe Ruins* (Ibid. July 1898) — *Reise nach Zimbabwe*, (Petern. Mitteil. 1892. S. 283ff)

⑧ D. Randall-McIver; *Mediæval Rhodesia*, London 1906. — *Encyclopaedia Britannica* (14th ed.) vol. I, p.316. Vol. XXII, p. 950. 244.

⑨ Periphus, 16. 村川氏譯書 150頁 註1參照

⑩ Prolemaeus, 19,1—H. Schlichter; *Prolemy's Topography of Eastern Equatorial Africa* (Proc. Roy. Geogr. Soc., Vol. XII, 1891)

⑪ G. Schott; *Geographie des Indische u. Stillen Ocean* Hamburg 1935, S.232ff

⑫ Herodotus III. 152.

六

以上の如く東南アフリカのソファアラ説も古代の海上交通の點から觀て肯定し難いとすれば、オフィルを推定し得るのは、紅海から東アフリカまでの海岸であつて、而も沿岸から比較的近距离に豊富な産金地を有して居たところとなるが、東アフリカやソマリランドには斯る産金地を見出し得ないため、結局オフィル問題の解決に残された土地は、紅海からナイル河の流域にかけての地方となるのである。

この紅海とナイル河との中間の地域、即ちナイル河中流東岸のヌビア、及びヌビアから連續するアビシニア北部の山岳地帯は、過去數十年間の濫掘の結果——ヌビアのアスアン・ドンゴラ間の地域の如きは金鑛床は全く涸竭してやつて居る——金の産出は著しく減少し、現在では世界金産額の〇・一％に達せぬ状態である。併し乍ら古代に於てはこの地方が極めて豊富な産金地であつたことは、ヌビアから青ナイル流域にかけて無数の金を採取して廢坑が認められるのみならず、ヌビアとは古代エジプト語の *noṭis* 即ち

ソロモン王のオフィル航海に就いて

金を意味する言葉から山來したものでありまたナイル河より南に當るエチオピアでも、ヘロドトスによれば金が甚だ多く四人を繋ぐ極までが金で製られて居ると傳へられストラボも鐵・銅・寶石類と共に金の採掘が盛んであつたことを記して居る。ヘロドトスのこの物語の中には、勿論多分の誇張は含まれては居るが、古代の未開民族の間でも、金は最も貴重な存在であり、而も砂金の採集の外に、礦石を破碎し、原始的な水洗淘汰法を以てしても比較的容易に採掘し得るために、金の採掘はこの地方では極めて早くから行はれたに相違ないのである。また金は重量に比して最も高價なものであるため、交通の未發達な古代にあつては、金が未開民族と文化民族との交易に於ける最も重要な貿易品であつたことは、ヘロドトスが記すところのスキチア奥地アリアスエイ族やグリフィンの物語によつてもうかゞはれるのであるが、古代文化の發祥地エジプトに接するヌビアやアビシニアの地方からは、ヌビアに關する記録が既に古王國時代に存在するのをもみても多量の金が非常に古い時代からエジプトに輸出されてゐたことは瞭かであり、ナイル河沿岸の

Elephantine (現在のアスワン附近) の如きは、ヌビアの金、或は象牙や香料などの取引市場として發達したのである。

従つてエジプトの國力が強大になつた時には、エジプトはヌビアの金鑛を自らの手中に收めんとして、屢々ヌビアの遠征を行つたのであるが、殊にラムセス (ラーメス) 二世 (紀元前1300年—1233年) は王朝の新しい財源を獲得せんとして、即位後先づヌビヤを攻略して、(紀元前一二八二年) Alia 金山 (現在の Wadi Allaki) の開發に當つたのであつて、現存するパピルスに描かれたヌビア金山の古地圖も略同様時代のものと同様と看做される。併し乍らラムセス二世の没後は、エジプトは内亂と外敵の來寇によつて昔日の覇權を次第に失ひ、紀元前十世紀頃、即ちオフィルの航海の行はれた頃は、エジプトの國內は分裂状態を呈し其の政治的勢力は著しく衰退して、ヌビアは勿論エジプトの羈絆を脱し却つてヌビア人がエジプトに侵入する有様であつた。それ故にヌビアやアビシニアに産出する金のエジプトへの輸出は、當然殆ど停止の状態に陥つたと考へられるから、その輸出のルートは主としてエヂプトから紅海の方

面に轉ぜられ、更に紅海沿岸からアラビア或はメソポタミアの諸國に送られたに相違ないのである。

紅海の沿岸は典型的な斷層海岸であるため極めて港灣に乏しく、ヌビアやアビシニヤへの門戸となるべき地點は、舊イタリア領エリトリアのマッサワ、即ち古代の Adulis 以外には認められない。而もこのマッサワを中心としたエリトリアの沿岸にはハム系のダナキール族が居住し、彼等自らは古くからアファルと稱し、またこの地方もアファルと呼ばれて居た。従つて R. Hennig や A. Hermann は Afar Ⅱ Ouhé と看做し、マッサワ附近が即ち古代のオフィルであると推定して居る。この假定を肯定するならば、このオフィルの位置は紀元前十世紀頃の海上交通に於ても容易に到達し得る範圍内にあり、且つイスラエルからは海上交通に據らねば到達し得なかつたところとなる。

また金以外にオフィルの産物として聖書に記された銀・寶石・象牙・白檀・木猿猴等は、この地方に産出するか、またはその與地の地方から求め得るものであり、紀元前五世紀頃エジプトのハットセプス女王の下にブントから齎

された香木・象牙・黒檀・金・肉桂樹・香料・顔料・狒々猿・犬・豹の毛皮・土人等の産物と比較すれば、その間に類似性が認められるが、プントも亦一般にエリトリアからソマリランドに亘る沿岸と想定されて居る^⑮。殊に象牙は古來この地方から優良なるものを産出するために有名であり「エリウトウラー海案内記」にも「ナイル河の彼岸からの象牙は總て……アドウーリに運ばれる」と記されてゐる。白檀木は嚴密に解すれば、白檀^{サントアルウッド}(Santalum Album Linn)は南部印度原産の植物であつてアフリカには産出しないがアフリカの熱帯林には黒檀・マホガニー・オクレーメ・アカジュー等の建築・家具材として用ひられる香木や熱帯材は甚だ豊富である。従つて問題は孔雀である。孔雀は印度からマレー方面へかけての南アジアに産し、アフリカには是に類するものは見られないため、前述の如く E. Quartermer は孔雀ではなくして、鸚鵡かホロホロ鳥であると稱して居るが、證據は薄弱である。それよりは寧ろ C. Niebuhr の見解に従つて、ヘブライ語の *Shak-jin* は *Sak-jin* (奴隸) と讀まらるべきではなからうか。奴隸は古代の

南海貿易、殊にアフリカの貿易に普く認められる現象であり、前記のプントからも土人の男女や子供までがエジプトに送られて居るが、オフィルの航海が掠奪貿易であつたと解するならば、一層その可能性は大であると考へられる。

また創世記の民族系譜からみても、シニバとオフィルが相當密接な關係を有するものであることは既に述べたところであるが、オフィルが斯の如く現在のエリトリア地方であるとすれば、アラビアのイニーマンに當るシニバとは僅に狭い紅海を隔てるのみであり、地理的位置からみてもオフィルとシニバとは密接な關係を有し得ることとなる。従つてシニバ王國は金・象牙・香料等のアフリカ與地の物産をオフィルを經由して輸入し、更に此等の物産をアラビア南部の物産などと共に陸商交通を利用して、メソポタミアやパレスチナ地方に輸出する仲繼貿易を營んで居たことは舊約エゼキエル書(二七・二二)にも「シバとラママの商人汝(ツロ)と商をなし諸々の貴き香料と諸々の寶石と金をもて汝と交易せり」と記されてあることによつても認められる。即ちシニバは恰も地中海貿易に於けるフェニキアの

如き地位を南海貿易に於て占めて居た商業國であつたと看做し得るのであつて、シニバ女王がソロモン王に贈つた一二〇タラントの金も亦、オフィルから求められたものと考へられる。この推定を更に推し進めるならば、ソロモン王のオフィル航海の目的は、直接オフィルに交通することにより、アフリカの金・象牙などの物産をシニバを仲繼せずして獲得せんとしたのであり、またシニバ女王のソロモン王訪問の眞意は、このオフィル航海によつて打撃を受けたシニバ王國が、ソロモンの南海貿易に對する積極政策を緩和せしめるために、女王自らイストラエル王國に朝貢したのであるとも解し得るであらう。

たと斯の如くエリトリア地方を以てオフィルに當てるとすれば、オフィルの航海に何故三ヶ年の年月を要したのであらうか。兩岸が殆ど無住の沙漠地帯でかこまれ、世界の中でも最も暑熱の地方である紅海に於ては、沙漠の陸上交通の場合と同様に沿岸の湧水の地點を求めて碇泊しなければならぬため沿岸航海も亦遅々たるものであつたことは豫想されるが、プリーニウスによれば紅海沿岸の *Borotike*

からアラビアの西南端 *Qasim* までの行程を三〇日として居ることから比較しても、エジオンゲベルからエリトリアの沿岸までの往復に三ヶ年を要したとは考へられない。併し乍ら當時の航海に於ては、外國の港灣に風や貿易の關係から長期間、時には一ヶ年以上も滞在することは稀でなかつたのであるから、オフィルの航海の場合に於ても同様にエリトリアやその對岸のアラビア、即ちシニバの港灣に長期に亘つて碇泊し、掠奪や普通の貿易、或は船舶の修理等を行つたのであると解するならば、オフィルの航海も當然三ヶ年の年月を費したのであらう。

- ① K. Futterer: *Afrika in seiner Bedeutung für die Goldproduktion*, Berlin 1895, 特に地圖參照。
- ② R. Hemig: a.o.
- ③ W. Smith: *Dictionary of Greek and Roman Geography*, London 1853, I. P.450
- ④ Herodotus, II 23.
- ⑤ Strabo, XVII, 821
- ⑥ A. Neuburger: *Technik des Altertums*, Leipzig 1919, S.11—13
- ⑦ 「オタ騾羅巴の北部には、明かに兎も角斷然最も多量の

金が存在する。それが如何にして得られるか、之も私には的確に云へないが、髮眼族のアリイヌボイがグリッブスから掠奪して來ると云はれる。』Hrodolts, III 116 (青木巖比呂譯下)。

⑧ J.H. Breasted; A History of Egypt, London 1906, p.94.

⑨ J. H. Breasted: Ancient records of Egypt, New York 1906, III 119—123

⑩ K. Futerer; a. a. O., S. 8ff. 着色複製圖あり。

⑪ Encyclopaedia Britannica

⑫ R. Hennig; a. a. O., S. 31—33

⑬ A.Hermann: Pally-Wissowa-Kroll, Realencyklopedie der Klassischen Altertumswissenschaft, Bd. XVII. 1939, S. 647—49.

⑭ J.H.Freasted: Ancient records of Egypt. I 216—235

⑮ 拙稿「メント考(古文化第一輯八九—九六頁)」

⑯ Penplus, 4. 村川氏譯書七九頁

⑰ F.Hommel; Ethnologie und Geographie des

Alten Orients. (Handbuch der Altertumswissenschaft) S.553. Anmerkung. Nr. 2. 下依。

⑱ Plinius, IV 23, 104.

⑲ 例へば Homer, Odyssee XV 464—458 「蘇在ウマロ一年の長きに亘り、中廣き船に貨物の數々を彼ら(ロー

ンロモン王のオフィル航海に就いて

ケース)はやがて集め入る。斯して國に歸るべく舟に貨物の滞る時、……」(土井晚翠氏譯による)

七

以上の如くオフィルそのものは産金地ではないが、ヌビア及びアビシニアの古代の産金地に對する輸出地として、紅海沿岸のエリトリア地方にこれを推定するのが最も妥當であるとすれば、なほ最後に殘された問題は、ソロモン王が如何にして四二〇乃至四五〇タラントの金を獲得し得たかと云ふ點である。

一タラントを現在の重量を以つて換算すれば四二—四四兩に當るから、オフィルから齎された金は、四二〇タラントとしても一八兩以上の重量となる。若しオフィル航海を以つて、一般に解されて居る如く普通の通商貿易を目的としたものであるならば、これだけ多量の金を購入するには、その代償として蓋し莫大な商品が必要としたであらう。然るにイスラエル國自體には何等見るべき産物を有しないのみならず、當時の海上交通によつては、斯る多量

の物資を輸送することは到底不可能なことである。それ故に A. Soelbeer^② や G. Wegner^③ などはイスラエル人及びフニキア人がオフイルの土地に上陸し、その附近に於て、彼等自身が金鑛を發見してその開發に従事したのであり、それが爲にオフイル航海も歸國までに三ヶ年の年月を要したのであらうと云ふ見解を下して居る。併し乍ら、鑛脈から金鑛を採掘するにしても、或は鑛床から砂金を採集するにしても、鑛業の技術は例ひそれが原始的なものであつても、特殊な技術と熟練を要するものである。然るに鑛産物を産出しない純然たる農業國であつたイスラエルに於ては鑛業の技術を習得することは不可能であり、鑛業の發達は全然見られなかつた。またイベリア半島のフニキア植民地、即ちタルテソス（タルシ、）に於ては、銀及錫鑛の採掘が行はれて居たことは既に述べたところであるが、金はフニキアの領土内でも全く産出しなかつた。^④ 従つてフニキア人もイスラエル人と同様に、金鑛に關する知識や技術は殆ど有して居なかつたと考へられるにも拘らず、オフイルに於て果して僅か二、三ヶ年間に斯も多量の金を獲得

し得たかは甚だ疑問とすべきである。

斯の如く考へるならば、オフイルの航海は掠奪貿易であつたと看做さざるを得ない。古代の海上貿易にあつては、フニキア人の貿易に認められた如くそれが正常な通商貿易を目的としたものであつても、時には他の船舶や沿岸の都市とか村落を襲撃し、多くの物資や奴隸として人間までも掠奪することが決して稀ではなかつた。^⑤ 而もオフイルの場合には斯る偶發的なものではなく、オフイル遠征とも呼ばるべき最初からの計畫的な掠奪貿易であつたのである。

オフイルの金はイスラエルにはダビデ王時代にも輸入されて居り、^⑥ オフイルには優秀な金が多量に産出することは當時から既知の事實であつたと思はれるが、莊大な王宮や神殿の遺營、華美な宮廷生活等に多大の財力を費し、如何にして常に財源を確保するかに腐心して居たソロモンにとつては、オフイルの金は確かに魅力的な存在であつたであらう。従つてこれを最も効果的に獲得するには、シニバの如き他國の仲繼貿易に據らずして、直接オフイルに赴いて強制的に奪取することであつた。併しパレスチナからはオ

フイルへは海上交通以外にはなかつたのであるが、海洋航海の經驗も技術も有しないイスラエル人單獨ではオフイルへの航海は不可能であつた爲、ソロモンは彼と親交のあつたティルス¹のヒラム王にその援助を依頼したのである。またフェニキア人は航海や貿易に就ては常に秘密を嚴守し、他國民族と決して協力することがなかつたにも拘らず、オフイル航海の場合にのみは、ヒラムが進んでソロモンに助力を約したのは、單にヒラムのソロモンに對する友情のみによるとは解し難い。おそらくフェニキア人も地中海貿易から更に紅海方面の南海貿易へ進出せんとする意圖を有しては居たが、紅海沿岸に領土を有して居なかつた爲、エジプトンゲベルの如き適當な根據地をいままゝ得ることが出来なかつたこと、或はフェニキア人は屢々掠奪を行つて居るが、元來が商業民族であつたが爲に、ダビデ王以來隣邦の諸民族を打ち破つたイスラエル人の強大な武力の援助なくしては、フェニキア人でも事情の不明な紅海に於て、オフイル航海の如き大規模な遠征航海を行ひ得なかつたことな

ソロモン王のオフイル航海に就いて

どが、彼等をしてオフイル航海に参加せしめた動機として考へられる。^①

要するにソロモンは兵力や食糧などを準備し、ヒラムは航海の方面を擔當し、斯して彼等の協同によつて、オフイルの遠征が決行されたのである。またその年代は、ソロモンの即位の年を紀元前九七三年とすれば、即位後四年間に王宮と神殿の造營が開始され、約二〇年後に完成したことがなつて居るのであるから、オフイルの航海は此等の造營工事が一應完了し、また長年の造營による莫大な支出のため、イスラエル王國の財政が最も不足を上げて居た頃とみて、大體紀元前九四五年前後と推定される。

併しソロモンの死後は、イスラエルの王朝は南北に分裂し、國力は著しく衰退した爲、オフイル航海の如きは勿論行はれることなく、たゞヨサファト(紀元前八七五年—八五一年)の時代に一度だけ計畫されたが、エジプトンゲベルに於て暴風の爲に船舶は沈没して失敗に歸し、聞もなくオフイルの物語は、古代の人々によつても全く忘却されて了つたのである。

- ① A. Hermann: a. a. O., S. 68. A. Soetbeer: a. O., Anlage C. s. 167f.
- ② A. Soetbeer: a. a. O., S. 167.
- ③ G. Wegener: Die Geschichte der See-Weltstrasse von Fainopa nach Ostasien, (Weltverkehr 1911/2) S. 299.
- ④ R. Hennig: a. a. O., s. 95.
- ⑤ 「彼等(フニキア人)が海賊であると同様に商人であつたかどうかは言ひ難い—彼等自身も實は知らなかつたのだ—海上で出會ふ船舶に對し、我は屢々訪れた土地の住民に對し、彼等が平和的な態度に出るか、好戰的な態度に出るか、おそろくその瞬間の情勢によつて決定された。」 G. Missero: The Struggle of the nations London 1896, 1905. P. 195. 6

平安京の經濟

題して「平安京の經濟」といふ、その目的とするところは單に平安京に於ける市民の經濟生活の諸相を概観しその

- ⑥ 「また我(ダビデ王)わが神の家を悦ぶが故に聖所のために備へたる一切の物の外にまた自己の所有なる金銀をわが神の家に獻ぐ即ちオフルの金三千タラント精銀七千タラントを獻げてその家人の壁を敷ふに供ふ」(摭代志略三九・三〇四)
- ⑦ R. Hennig: a. a. O., S. 301f. 8
- ⑧ 「ソロモンのイスタルエルに王たる第四年ジフの月即ち二月にソロモンエホバのために家を建てることを始めたなり」(列王紀略上六・一)「ソロモン二十年を経て二つの家即ちエホバの家と王の家を建をはり……」(列王紀略上九・一〇)
- ⑨ 「ヨシヤパテタルシシの船を造りて命を取るためにオフルに往かじめんとしたりしが其船エシオンゲベルに壞れたれば遂に往くに至らざりき」(列王紀略上三二・四八)

柴田實

變遷を歴史的に叙述するにあるのではなく、當時に於ける全國唯一の都市としての平安京の經濟が、律令制度の下に